

2019年度新聞協会賞「編集部門」応募作品一覧

「ニュース」部門	19社29件（追加応募4件含む）
----------	------------------

「写真・映像」部門	17社20件
-----------	--------

「企画」部門	41社47件
--------	--------

合 計	47社96件
-----	--------

2019年度新聞協会賞「編集部門」応募作品一覧

「ニュース」部門（19社29件）	
被推薦者	作 品 名
朝日新聞社 日産カルロス・ゴーン前会長事件取材班 （代表）東京本社編集局社会部次長 佐々木 隆広	日産自動車カルロス・ゴーン会長逮捕をめぐる一連のスクープと関連報道
〈作品概要〉東京地検特捜部が日産のゴーン前会長を金融商品取引法違反で逮捕することをスクープし、デジタル速報した。速報は世界に衝撃を与え、各国のメディアに転電された。羽田に到着したジェット機の様子も動画で特報。その後も捜査の核心に迫る特報を重ねた。	
毎日新聞東京本社 「代替わり」取材班 （代表）編集編成局政治部 野口 武則	新元号「令和」の考案者・中西進氏の特定など元号に関する一連の報道
〈作品概要〉新元号「令和」を報じる4月1日夕刊1面で「中西氏が考案か」と特報し、同3日朝刊1面で「中西進氏が考案」と特定した。同2日朝刊1面では、30年間の準備作業を担った官僚・尼子昭彦氏（故人）の存在を特報。検証取材の積み重ねが一連の特報につながった。	
読売新聞東京本社 「不正入試問題」取材班 （代表）編集局社会部主任 渡辺 晋	東京医科大はじめ医学部入試における女子差別・浪人生差別の実態を暴き、試験制度改革や被害者救済につなげた「医学部不正入試を巡る一連の報道」
〈作品概要〉東京医科大が入試で、女子や浪人回数の多い男子受験生の得点を一律に減点していた。背景には女性医師を敬遠する大学病院の体質があった。報道をきっかけに、入試差別は全国の大学医学部に蔓延していたことが判明。元受験生の救済や入試改革はいまも続く。	
読売新聞東京本社 編集局地方部 向山 拓 編集局横浜支局次席 宮下 洋介	日本陸連の警告後も中高生の陸上選手の一部で不適切な鉄剤注射が行われていた事実をスクープし、選手の健康を守る動きにつなげた一連の報道
〈作品概要〉陸上界の公然の秘密だった鉄剤注射が、中高校生の中・長距離走選手の一部で日本陸連の「警告」後も使われ続け、健康被害が出ていることを報じた。端緒をつかんだのは地方支局の記者。一連の報道により、陸連、医師会、スポーツ庁、厚労省などが不適切な鉄剤注射の禁止へ動き出した。	

「ニュース」部門（１９社２９件）	
被推薦者	作 品 名
日本経済新聞社 編集局コメンテーター 中山 淳史 編集局編集委員 田中 暁人 編集局社会部 倉辺 洋介	カルロス・ゴーン元日産会長 逮捕後初のインタビュー
〈作品概要〉２０１８年１１月に逮捕された日産自動車元会長カルロス・ゴーン被告の逮捕後初となるインタビューを特報した。日産経営陣へ思いや、仏ルノーとの経営統合を協議していたことなどを、電子版を通じて日本語と同時に英語でも世界に発信した。	
日本経済新聞社 （代表）編集局企業報道部 堀田 隆文	「日立、英原発事業を中断」など日本の原発輸出の頓挫をめぐる一連の報道
〈作品概要〉日本の官民が進めてきた原発輸出政策が行き詰まっていることを、日立製作所の英原発事業の中断をはじめとする多くの特報で伝えた。 原発事業の厳しさや日本のエネルギー政策が転換を迫られている姿も報じ、国内外の読者の問題意識を高めた。	
産経新聞東京本社 元北朝鮮兵士インタビュー取材班 （代表）編集局社会部編集委員 加藤 達也	板門店突破・銃撃事件 元北朝鮮兵士へ世界初の単独インタビュー
〈作品概要〉２０１７年１１月に板門店で起きた越境事件で銃撃を受けた元北朝鮮兵士に対する、他メディアに先駆けたインタビュー。最前線に配置された精鋭兵士から金正恩朝鮮労働党委員長が「無理に神格化」されているとの証言を引き出した上、米朝緊張下での北朝鮮国民の意識を詳報した。	
産経新聞東京本社（追加応募） 対韓輸出管理問題取材班 （代表）編集局社会部編集委員 加藤 達也	輸出管理厳格化の真相 韓国企業の不正輸出のスクープ
〈作品概要〉韓国で、戦略物資の親北朝鮮国向け不正輸出が相次ぎ摘発され、輸出管理の甘さが露呈していることを特報。一方、信頼関係の下に輸出管理を行うことが困難になったとして、政府がフッ化水素などの対韓輸出管理を強化、「ホワイト国」から除外することも他社に先駆けて報じた。	

「ニュース」部門（１９社２９件）	
被推薦者	作 品 名
共同通信社 障害者雇用水増し問題取材班 （代表）編集局経済部 金友 久美子	中央省庁の障害者雇用水増し問題のスクープと一連の報道
〈作品概要〉中央省庁が長年、法定雇用率を達成したように見せかけるため、障害者の雇用数を水増ししていたことをつかみ、２０１８年８月にスクープした。水増しはその後、地方自治体や国会、司法でも発覚。行政機関へのチェック機能を強化する制度見直しにつながった。	
時事通信社 金融政策取材チーム （代表）編集局経済部日銀クラブキャップ 川村 豊	「日銀、長期金利の上昇容認」のスクープ
〈作品概要〉アベノミクスの中核として５年以上が経過した大規模金融緩和の副作用を軽減するため、日銀が初めて軌道修正に踏み切る方針をスクープした。長期金利の誘導目標を柔軟化し、一定程度の上昇を容認するというニュースは、内外の金融市場に大きな衝撃を与えた。	
読売新聞大阪本社 和牛事件取材班 （代表）編集局社会部主任 大達 大二	和牛受精卵持ち出し事件を巡る一連のキャンペーン報道
〈作品概要〉大阪府警が摘発した和牛受精卵流出事件で、捜査の動きを相次いで特報したのみならず、容疑者を独自に割り出していち早く事件の構図を明らかにした。事件取材と調査報道の手法を融合させ、遺伝資源保護の体制強化を訴えた一連の報道は社会の関心を集めた。	
北海道新聞社 東京報道センター部次長 舟崎 雅人 東京報道センター 小森 美香	「日本がＩＷＣ脱退方針」のスクープ
〈作品概要〉政府が約３０年ぶりの商業捕鯨再開に向けて、国際捕鯨委員会（ＩＷＣ）から脱退する方針を固めたことを、いち早く報じた。戦後、日本が国際機関から脱退した例はほとんどない。歴史的な外交政策の転換を、国際社会への影響とともに重厚に記事化した。	

「ニュース」部門（１９社２９件）	
被推薦者	作 品 名
秋田魁新報社 イーゼス・アショア配備問題取材班 （代表）報道センター社会地域報道部編集委員 松川 敦志	イーゼス・アショア配備問題を巡る「適地調査、データずさん」のスクープなど一連の報道
〈作品概要〉イーゼス・アショア配備計画を巡る防衛省の調査データに誤りがあることを調査報道で明らかにした。地元で根ざして計画を追った１年余りの報道から生まれた特報を機に、知事は国との協議を白紙撤回。防衛省は、新年度予算案概算要求への関連費計上を見送った。	
信濃毎日新聞社 編集委員 渡辺 秀樹	「靖国懇談会 議事録が存在」のスクープと懇談会検証記事
〈作品概要〉中曽根康弘氏が戦後の首相初の靖国神社公式参拝をする根拠になった「閣僚の靖国神社参拝問題に関する懇談会」の議事録が存在、公式参拝に向け議論が誘導されたことが分かった。議事録の後半部分はなくなっており、歴史的公文書のずさんな管理も浮き彫りに。	
中日新聞社 「呼吸器事件」取材班 （代表）編集局編集委員 秦 融	調査報道「呼吸器事件」
〈作品概要〉最高裁の再審開始確定（３月）に至る２年超の調査報道。獄中での精神鑑定、手紙の分析など独自取材で冤罪の可能性を指摘し、併せて裁判官の検察依存、最高裁の無反省、真実よりメンツ重視の検察という構図が生み出す冤罪のメカニズムを告発した。	
愛媛新聞社 豪雨災害取材班 （代表）編集局報道部副部長 二宮 京太郎	西日本豪雨災害を巡る一連の報道
〈作品概要〉２０１８年７月の西日本豪雨では、愛媛県でも災害関連死を含め３３人が犠牲となり、住宅や事業所、農地、インフラなどに甚大な被害を受けた。地元紙として被災者の心情に寄り添いながら被害や復旧・復興の状況を詳報し、防災・減災の観点で課題を検証した。	

「ニュース」部門（１９社２９件）	
被推薦者	作 品 名
西日本新聞社（追加応募） 編集局社会部 宮崎 拓朗	かんぽ生命保険料二重払いのスクープと一連の報道
〈作品概要〉かんぽ生命保険が顧客に不利益な保険の乗り換え契約を繰り返し、保険料の二重払いをさせていたケースが約２万２千件に上ることをスクープ。過剰なノルマに迫られる現役郵便局員らの証言を繰り返し報じ、民営化以降最悪といえる日本郵政グループの不祥事を暴いた。	
日本放送協会 戦没者遺骨問題取材班 （代表）報道局社会部副部長 木村 真也	「戦没者遺骨“日本人なし”調査結果公表せず」の特ダネ
〈作品概要〉戦死した日本兵としてフィリピンで収集された遺骨について、７年前に厚生労働省からＤＮＡ鑑定を委託された専門家２人が「日本人とみられる遺骨は１つもなかった」とする鑑定結果をまとめていたことをスクープ。遺骨収集事業のずさんな実態を明らかにした。	
日本放送協会 無給医問題取材班 （代表）報道局取材センター社会部 小林 さやか	無給医知られざる実態 ニュースウォッチ９とNEWSWEBでの一連の調査報道
〈作品概要〉大学病院で診療を無給で行う「無給医」と呼ばれる医師。その存在を国は長年否定してきた。担当記者は全国３０の病院に今も「無給医」がいることをスクープ、ネットでも実態を連載した。その結果、国は調査に動き２１９１人の無給医がいることを初めて認めた。	
日本放送協会 報道局政治部副部長 岩田 明子	新元号４月１日公表へ 安倍首相意向固める
〈作品概要〉皇位継承に伴う新たな元号について、安倍首相は、４月１日に閣議決定し、その日のうちに公表する方針を固めた。	
日本放送協会（追加応募） 報道局政治部副部長 岩田 明子	「ハンセン病家族訴訟 控訴断念へ」のスクープ
〈作品概要〉ハンセン病の家族訴訟で安倍総理大臣は家族の被害も深刻に受け止める必要があるとして、控訴を断念する方針を固めた。	

「ニュース」部門（１９社２９件）	
被推薦者	作 品 名
日本放送協会（追加応募） 昭和天皇「拝謁記」取材班 （代表）報道局取材センター社会部副部長 鈴木 高晴	昭和天皇の知られざる肉声記す「拝謁記」のスクープ
〈作品概要〉昭和天皇と初代宮内庁長官との会話が克明に記された「拝謁記」を入手し、天皇が戦争の悔恨を繰り返し語りその思いを表明することを強く希望していたことや、東京裁判後の退位の可能性、それに改憲再軍備の必要性に言及していたことなどを連日スクープした。	
TBSテレビ 報道特集代替わり取材班 （代表）報道局報道番組部ディレクター 住友 洋介	大正天皇の女官テープが語る退位の原点
〈作品概要〉日本で発見した「大正天皇に仕えた女官の肉声テープ」や、米国で発見した「歴代天皇直筆の親書」等、歴史的な新資料を基に近代天皇の代替わりがいかに行われたのか知られざる事実を明らかにし、上皇さまが退位という形での代替わりを望まれた背景に迫った。	
TBSテレビ 「消えた留学生」取材班 （代表）報道局社会部 神保 圭作	シリーズ「【現場から、】消えた留学生」
〈作品概要〉東京福祉大学で大量の留学生が所在不明という事実を、独自入手した内部資料などからスクープし、シリーズ『【現場から、】消えた留学生』と題して放送。「留学生３０万人計画」のひずみや「留学生ビジネス」というべき問題も浮き彫りにした。	
日本テレビ放送網 政経機動班 （代表）報道局政治部 富田 徹	「平成」改元最大の謎…考案者記した文書を独自入手
〈作品概要〉３０年以上が経った現在も政府が情報開示を拒んでいる「平成」改元の経緯。特に考案者をめぐっては複数の名前が挙がるなど最大の謎とされてきたが、日本テレビは考案者の氏名が記された政府の文書を入手。昭和天皇崩御の２年前には選定に入っていたことも明らかになった。	

「ニュース」部門（１９社２９件）	
被推薦者	作 品 名
フジテレビジョン FNNバンコク支局取材班 （代表）バンコク支局長 佐々木 亮	タイで摘発された日本人特殊詐欺グループの犯行メモを巡る一連の報道
〈作品概要〉特殊詐欺グループが現場に残した犯行の詳細を記録したメモや摘発の瞬間を捉えた映像。FNNが入手したメモを基にした報道で、高齢者だけでなく若者もターゲットになり、グループが海外のアジトを拠点に犯行を重ねている実態が明らかになった。	
フジテレビジョン 東京医科大学不正入試問題取材班 （代表）報道局取材センター社会部副部長 上法 玄	東京医科大学不正入試問題「裏口入試受験生リスト」のスクープ
〈作品概要〉東京医科大学最高幹部が数年前、入試担当幹部職員に特定の受験生を合格させるよう指示した際に手渡した手書きの受験生リストなどの現物を入手し、最高幹部主導で裏口入試を行っていた動かぬ証拠として「裏口入試受験生リスト」その物をスクープしたもの。	
フジテレビジョン 政治部・新紙幣取材団 （代表）報道局政治部長 渡邊 奈都子	「政府が２０年ぶりに１万円札・５千円札・千円札を刷新へ」をスクープ報道
〈作品概要〉政府が２０年ぶりに紙幣を刷新し、新１万円札に「資本主義の父」と呼ばれる渋沢栄一、５千円札に津田塾大学創始者の津田梅子、千円札に「近代日本医学の父」と言われる北里柴三郎が採用されることをスクープ。更に２０２４年メドの刷新時期も報じた。	
テレビ東京 ガイアの夜明け取材班 （代表）報道局報道番組センターチーフプロデューサー 野田 雄輔	ガイアの夜明け シリーズ企画・マネーの魔力
〈作品概要〉賃貸アパート大手・レオパレスのアパートで、火災から入居者の安全を守る上で必要な「界壁」が、施工されていない事実をスクープ。レオパレスは事実を認め謝罪。国交省は全国３万棟以上の調査・改修を指示し入居者約８０００人に転居をうながす事態に。３回のシリーズで伝えた。	

2019年度新聞協会賞「編集部門」応募作品一覧

「写真・映像」部門（17社20件）	
被推薦者	作 品 名
朝日新聞社 東京本社編集局国際報道部兼映像報道部員 竹花 徹朗 東京本社編集局国際報道部サンパウロ支局長 岡田 玄	人道危機 ベネズエラ
〈作品概要〉かつて南米屈指の豊かさを誇ったベネズエラが、石油価格下落と国家運営の失敗で経済が破綻、庶民が食料、医薬品、燃料を入手できない人道危機に陥っている。政権の失政によって弱者から犠牲になっていく現状を臨場感のある写真で報道した。	
読売新聞東京本社 「写真は語る」取材班 (代表) 編集局写真部次長 和田 康司	あの一瞬、この構図。1枚に込められた写真の力——企画「写真は語る」
〈作品概要〉土曜夕刊一面で随時掲載している企画「写真は語る」で取り上げた中から選んだ9点。膨大な写真から担当デスクが複数の候補作を選び、編集局幹部が掲載写真を決定。意外な構図から見える新たな断面や、カメラだから切り取れた瞬間を大判の写真で伝える。	
読売新聞東京本社 北海道支社編集部報道課（写真） 鷹見 安浩	緑の山肌がえぐられ、異様な姿を朝日にさらす北の大地——「緊急空撮・北海道胆振東部地震」
〈作品概要〉2018年9月6日未明、北海道胆振地方を震源とする地震があり、厚真町で震度7を観測した。同町では、広範囲で土砂崩れが発生。日の出もない時間に空撮した山々は、赤茶色の土をむき出しにしていた。作品は地震のすさまじさを象徴する1枚となった。	
日本経済新聞社 (代表) 西部支社編集部 澤井 慎也	ゴーン日産元会長の保釈時の写真および逮捕後の一連の報道写真
〈作品概要〉日産自動車元会長のカルロス・ゴーン被告が、3月に東京拘置所から保釈された。作業服の変装姿は世界でも注目を集めた。マスクで顔を隠していたが、真正面からの撮影に成功し同氏の特徴である鋭い眼光をとらえた。その後も裁判に向け長期化する動きを追った。	

「写真・映像」部門（１７社２０件）	
被推薦者	作 品 名
産経新聞東京本社 パラアスリート企画取材班 （代表）写真報道局部次長 大西 正純	連載企画「写 ２０２０ パラスポーツ」～挑戦者の素顔～
〈作品概要〉東京パラリンピックを目指し練習に励む、アスリートの素顔取材した。パラスポーツは身体の障害を強調して撮影され、報道される事が多いが、あえて選手の素顔にこだわった。障害に負けることなく努力を重ねる選手の表情に、人間が持つ強さと可能性を感じた。	
共同通信社 ビジュアル報道局編集委員 原田 浩司	辺野古に土砂投入 民意はどこに
〈作品概要〉米軍普天間飛行場の辺野古移設問題で、沖縄の人々は「反対」の民意を繰り返し表明してきた。しかし、昨年１２月１４日、ついに辺野古への土砂投入が始まった。美しい海が変化していく様子とそれにあらがいつける人々の様子を記録した。	
毎日新聞大阪本社 編集局写真部 幾島 健太郎	台風２１号 関空大打撃
〈作品概要〉近畿地方で大きな被害を出した２０１８年９月４日の台風２１号。関西国際空港では高潮で滑走路や駐機場が浸水し、強風で流されたタンカーが連絡橋に衝突した。台風の通過後、日没ギリギリのタイミングで空撮ができ、被害の甚大さを国内外に伝えることができた。	
読売新聞大阪本社 西日本豪雨写真部取材班 （代表）編集局写真部次長 中原 正純	西日本豪雨で水没した町―岡山県倉敷市真備町の被害を伝える一連の報道写真
〈作品概要〉昨年７月の西日本豪雨は平成最悪の気象災害となった。岡山県倉敷市真備町で町の４分の１が浸水した全景を余すところなく空撮、病院に閉じ込められた患者らの救出作業を間近から撮影した。今回の災害で最大の特徴の一つである水害の恐ろしさを社会に伝えた。	

「写真・映像」部門（１７社２０件）	
被推薦者	作 品 名
岩手日報社 報道部写真班 （代表）編集局報道部次長 菊池 範正	夢の続き 海を越えて ～菊池雄星VS大谷翔平 大リーグ初対決～
〈作品概要〉米大リーグで活躍するマリナーズの菊池雄星とエンゼルスの大谷翔平。花巻東高を巣立った２人が６月８日（日本時間９日）、世界の大舞台で初対決した。夢を追う２人の姿はまさに県民の希望。カメラマン２人を米国に派遣し、決定的瞬間をダイナミックに伝えた。	
河北新報社 編集局写真部、デジタル推進室 （代表）編集局写真部長 早川 俊哉	とうほくドローンeye
〈作品概要〉ドローンを使って東北にある有名・無名の風景を撮り、毎月２回程度のペースで朝刊に掲載した。動画も撮り、ＱＲコードで鑑賞できるようにした。単に「ドローン映え」を狙っただけでなく、東日本大震災の被災地の今を撮ることも大きな目的だった。	
下野新聞社 障害者スポーツ取材班 （代表）編集局写真映像部長 野上 裕之	頑張れるんだ とちぎ・障害者スポーツの季節
〈作品概要〉障害者スポーツへの理解は浸透し、注目や人気も集まっている。障害者がスポーツを楽しむためには、周囲の支えが必要な場合も多いという。「プレーヤー」と「サポーター」。互いの想いを交錯させながら、障害者スポーツに関わる人々の１年間を写真で記録した。	
静岡新聞社 編集局写真部 久保田 竜平	「台風２４号の接近により海岸の消波ブロックに激しく打ち寄せる高波」のニュース写真
〈作品概要〉台風２４号が２０１８年９月３０日夜に静岡県内に最接近するとの予報で、警戒を伝えるため同日朝刊１面で掲載した写真。前日の２９日午後、静岡市駿河区の海岸に激しく打ち付ける高波と、国道１５０号の車両とを、高台から望遠レンズを使用して撮影した。	

「写真・映像」部門（１７社２０件）	
被推薦者	作 品 名
静岡新聞社 編集局写真部 二神 亨	静岡が誇る「世界の宝」 富士山臨時支局
〈作品概要〉２０１８年７月３１日から８月２日まで、弊社は富士宮口に臨時支局を開設し、霊峰の大自然や登山者の話題を発信した。期間中、雲海を黄金色に染める御来光や天空に映し出された天の川などの絶景を臨み、頂を目指す登山者と触れ合った。	
中日新聞社 「アニまるっと@東山Zoo」取材班 （代表）編集局写真部 長塚 律	連載企画「アニまるっと@東山Zoo」
〈作品概要〉名古屋市千種区の東山動物園の生き物たちにレンズを向けると、驚きの動きや、思わず笑ってしまう表情、人間のようなしぐさを見せる瞬間が見えてきた。「動物たちの魅力を“まるっと”読者に届けたい」そんな思いを写真とウェブ動画で読者に届けている。	
北日本新聞社 編集局写真部 （代表）編集局写真部次長 吉田 博昌	写真企画「おとフォトとやま」
〈作品概要〉富山らしい「音」を撮影者個々の視点でビジュアルに表現することを試み、紙とウェブサイトの２媒体を連動させ発信した。紙面に音を感じさせる写真を掲載し、本紙ホームページ「webun（ウェブン）」にアップした動画で実際の音を読者に聞いてもらった。	
京都新聞社 編集局写真部 佐伯 友章	龍谷大平安、執念の「１００勝」
〈作品概要〉第１００回全国高校野球選手権で龍谷大平安高校（京都）がサヨナラで勝利し、史上２校目となる甲子園春夏通算１００勝を決めた一瞬。	

「写真・映像」部門（１７社２０件）	
被推薦者	作 品 名
中国新聞社 「旅するミツバチ」取材班 （代表）編集局映像部デスク 山本 誉	写真連載「旅するミツバチ」
〈作品概要〉ミツバチは生きたセンサーだ。小さな体は環境のかすかな変化にも敏感に反応する。近年の異常気象や里山の荒廃、外来昆虫の侵入などの環境異変は、ミツバチとともに日本列島を旅する転地養蜂にも影を落とす。ミツバチたちの警告に耳を澄ませ、写真で追った。	
宮崎日日新聞社 「チャイム消えても」取材班 （代表）編集局写真映像部長 中島 雅隆	チャイム消えても みやざき写真ルポ 浦之名小編
〈作品概要〉宮崎市内の山手にあり、全校児童が７人となった浦之名小が３月、閉校した。１４５年の歴史を閉じるまでの半年間、写真部員が学校に足しげく通い、ルポや写真グラフなどで児童の表情や地域の思いを伝え、地方の現実や学校の統廃合の持つ意味を問いかけた。	
日本放送協会 NHKスペシャル「ロストフ」取材班 （代表）報道局スポーツ情報番組部チーフ・プロデューサー 川西 研	NHKスペシャル「ロストフの１４秒 日本vs. ベルギー 知られざる物語」
〈作品概要〉去年のサッカーＷ杯、日本の夢を打ち砕いたベルギーの１４秒間の超高速カウンターを双方の選手らの証言から徹底検証。刹那の判断、巧妙な罠や意外な伏線を次々と明らかにした。SNS用マルチカメラをテレビに活用し、スポーツの新たな映像表現を切り開いた。	
日本放送協会 報道局映像センター取材グループ 横山 真也	川崎殺傷事件、ヘリから捉えた刃物と見られる遺留物
〈作品概要〉川崎市でスクールバスを待っていた小学生らが刺され２０人が死傷した事件で、ヘリコプターから捜査の様子を取材。現場に残されたリュックサックから捜査員が取り出した、光る刃物のようなものを調べる独自映像は、犯行の計画性や残忍性を強く印象づけた。	

2019年度新聞協会賞「編集部門」応募作品一覧

「企画」部門（41社47件）	
被推薦者	作 品 名
朝日新聞社 「チャイナスタンダード」取材班 （代表）東京本社編集局国際報道部機動特派員 武石 英史郎	企画「チャイナスタンダード」
〈作品概要〉民主主義、人権、サイバー空間、生命科学、メディア、通貨……。世界第2の経済大国となった中国が、世界のルールを塗り替える。アフリカの辺境からワシントンの中枢まで5大陸20カ国以上を取材し、覇権をめぐる攻防の最前線をルポ。	
毎日新聞東京本社 「公文書クライシス」取材班 （代表）編集編成局特別報道部 大場 弘行	「公文書クライシス」 情報公開を骨抜きにする官邸・省庁の記録隠しを追及するキャンペーン
〈作品概要〉国民が情報公開請求できないよう、打ち合わせメールをすぐ削除。文書名はぼかす。首相と官僚の面談記録は作らない……。森友・加計問題で改定された公文書管理指針は早くも骨抜きにされている。政府の公文書管理の実態を暴き、隠蔽体質をただす調査報道。	
読売新聞東京本社 「覇権 米中攻防」取材班 （代表）編集局国際部次長 吉田 健一	経済、安保、科学など様々な分野で繰り広げられる米中の覇権争いを、全段見開きで多角的かつビジュアルに報じた企画「覇権 米中攻防」
〈作品概要〉経済・軍事・宇宙・科学技術——。超大国・米国と、米国に並び立つ「強国」を目指す中国のせめぎ合いは幅広い分野に及んでいる。両国の対立は日本にも影響を及ぼさずにはおかない。覇権を巡る米中のせめぎ合いを、ビジュアル素材も駆使して多角的に描いた。	
日本経済新聞社 データエコノミー取材班 （代表）編集局企業報道部次長 阿部 哲也	連載企画「データの世紀」とネット社会に関する一連の調査報道
〈作品概要〉20世紀が石油の世紀なら、21世紀はデータの世紀だ。ネットにあふれる情報資源の経済や社会への影響を検証、個人データ保護やGAF A問題など世界に広がる課題を明らかにした。日欧のAI指針、日本の「使わせない権利」も特報。政策論議に一石を投じた。	

「企画」部門（４１社４７件）	
被推薦者	作 品 名
東京新聞 「税を追う」取材班 （代表）編集局社会部 鷲野 史彦	「税を追う」キャンペーン
〈作品概要〉税金の流れを追い、無駄遣いや政官業の利権・既得権になっていないかを検証する調査報道キャンペーン。第1弾で膨張する防衛費を取り上げ、沖縄・辺野古の米軍新基地建設や東京五輪予算、税や保険料で9割を賄う薬剤費にもテーマを広げ、継続している。	
共同通信社 「捜査機関による個人情報取得」問題取材班 （代表）編集局社会部次長 斉藤 友彦	「捜査機関による個人情報取得」に関する一連の報道
〈作品概要〉検察、警察が裁判所の令状を取らず、捜査関係事項照会で「Tカード」の履歴など企業保有の個人情報や、生活保護行政の情報を取得し、捜査に利用している実態を明らかにした。市民の私生活が丸裸にされるリスクに警鐘を鳴らすキャンペーン報道を展開した。	
時事通信社 編集局外信部編集委員 城山 英巳	天安門事件３０年 日本大使館員が見た「流血の北京」
〈作品概要〉中国の民主化運動が武力弾圧された天安門事件から３０年。日本大使館はどんな情報を集め、流血の事態にどう対処していたのか。現場にいた日本人の視点から事件を捉え直すべく、当時の大使館員ら取材し、埋もれていた記録や秘話を掘り起こした。	
読売新聞大阪本社 （代表）編集局経済部長 橋本 佳与	関西経済面～紙面とイベントを連動させた新企画
〈作品概要〉大阪本社版朝刊に、関西の経済情報に特化した週3回の常設紙面「関西経済面」を新設。著名人らの寄稿文を紹介するコーナー「広論」に連動し、有料会員制の「読売広論セミナー」を開講した。紙面とイベントを融合させた新しい試み。	

「企画」部門（４１社４７件）	
被推薦者	作 品 名
産経新聞大阪本社 西日本豪雨取材班 （代表）編集局社会部次長 内海 俊彦	西日本豪雨 岡山・真備 避難所での被災者アンケートと連載に関する報道
〈作品概要〉西日本豪雨の被災地、倉敷市真備町地区でアンケートを実施し、ハザードマップを知っていることが早期の避難に結びついたことをデータで示し、極めて有効なことを提言した。連載企画では、平成最悪の水害となった原因を探り、新たな時代の防災を展望した。	
北海道新聞社 編集局 （代表）編集局報道センター次長 澤田 信孝	連載「激震 暗闇の大地(ブラックアウト)」など９・６胆振東部地震を巡る一連の報道
〈作品概要〉昨年９月６日未明に発生した最大震度７の胆振東部地震で全道が停電する中、夕刊、朝刊を休まず発行し、読者に被害状況や避難情報などを伝え続けた。２カ月後から始めた長期連載「激震 暗闇の大地」で被害を多角的に検証したほか、被災地に寄り添う連載も展開した。	
北海道新聞社 「子どもを守ろう」取材班 （代表）編集局報道センター次長 澤田 信孝	連載を中心とする「子どもを守ろう」キャンペーン
〈作品概要〉性犯罪や家庭内暴力などの被害に遭う子どもの実態を掘り下げ、未来に向けて「何をすべきか」を考えるキャンペーン。６部にわたる長期連載「子どもを守ろう」を展開するとともに、キャンペーン記事も定期的に掲載し、子どもを守る道筋などを示した。	
岩手日報社 ゆらぐ砦取材班 （代表）編集局報道部次長 八重樫 和孝	ゆらぐ砦 民生児童委員のいま
〈作品概要〉民生児童委員制度から１世紀。老老介護や引きこもりなど新たな社会問題への対応を迫られ、制度疲弊を強めている。なり手不足の背景は、活動を阻む壁は何か。課題を浮き彫りにし、支え合う社会の大切さを問い直した。	

「企画」部門（４１社４７件）	
被推薦者	作 品 名
河北新報社 「震災と住まい」取材班 （代表）編集局次長兼報道部長 富樫 茂	連載企画「安住の灯（ともしび）」－震災列島に生きる
〈作品概要〉東日本大震災から８年、いまだに仮設住宅が解消されない現状を踏まえ、「住まいの復興プロセス」の問題点を浮き彫りにした。東北を軸に北海道、熊本県を結び、災害法制で分断された生活再建の過程を検証。被災者主体の新たな支援制度へ転換を提起した。	
福島民報社 ５９市町村連携健康プロジェクト取材班 （代表）編集局報道部副部長 渡部 総一郎	「日本一」のふくしまへ ５９市町村連携健康プロジェクト
〈作品概要〉復興を目指す福島県を「日本一」にする上で、県民の健康増進が必須との思いから、社として県内全５９市町村と連携した健康増進を目標に企画を展開。連載・健幸を求めて、一口メモ・健やか日和、市町村長メッセージ特集ほか食育事業を県、県教委と始めた。	
下野新聞社 気候変動取材班 （代表）編集局社会部部長代理 横松 敏史	連載企画「気候変貌 とちぎ・適応への模索」
〈作品概要〉昨夏、記録的猛暑や極端な豪雨によって、全国で多くの人々が命を落とした。地球温暖化が進み、日常化するリスクに、どう向き合えばよいのか。昨年１２月の気候変動適応法の施行を機に、さまざまな分野での対策の在り方を地方から探り、適応への道筋を示した。	
上毛新聞社 「部活が変わる」取材班 （代表）編集局報道部 江原 昌子	連載企画「部活が変わる」
〈作品概要〉体罰や暴言、長すぎる練習時間―。時に子どもを苦しめる部活動を巡り、史上初ともいえる改革論議が始まった。２０１８年に国が指針を示したことで、現場に変化が出始めている。過熱化した状況は変わるのか。部活の実態に迫り、あるべき姿を展望する。	

「企画」部門（４１社４７件）	
被推薦者	作 品 名
神奈川新聞社 ヤフーニュース共同企画「平成の事件」取材班 （代表）社長室特命部長（前統合編集局報道部長） 渋谷 文彦	ヤフーニュース共同企画「平成の事件」
〈作品概要〉「Yahoo!ニュース」と共同で、平成の時代に神奈川県内で発生した重大事件を振り返った。本紙記者が取材した記事を軸にヤフーニュース編集者と企画を立て、本紙読者以外のネットユーザーにも広く読んでもらい社会問題解決の一步にしようと企画した。	
静岡新聞社 静岡の「平成」取材班 （代表）編集局社会部副部長 藪崎 拓也	静岡の「平成」
〈作品概要〉冷戦終結とバブル崩壊に始まり、相次ぐ自然災害や人口減少にも直面した平成。この30年間は地方に暮らす私たちの内面に何をもたらしたのか。本連載は単に事象を表面的に振り返るのではなく、それらを通して変化した人々の意識や価値観に迫った。	
信濃毎日新聞社 「ふるさとをここに」取材班 （代表）編集局報道部次長 向井 紀文	連載企画「ふるさとをここに」
〈作品概要〉戦後経済成長と一億総中流社会が様変わりし、少子高齢化や、個の孤立と困窮、将来不安が広がる。都市と農山村、日本を支える二つの象徴的なコミュニティーを徹底して見つめ、国のお仕着せでなく、足元から「自治」を捉え直し、再生する意義を訴えた。	
中日新聞社 社会部「メメント・モリ」取材班 （代表）編集局社会部デスク 小笠原 寛明	連載「メメント・モリ」
〈作品概要〉年間死者が１３０万人を超える多死社会を迎えた日本。火葬場の残骨灰を巡り、灰に含まれた金の回収を狙った業者らが超低額で処理を請け負う実態や、死にゆく人と見守る家族の最後の日々など、現代人が遠ざけてきた死の現実を長期連載とニュースで報じた。	

「企画」部門（４１社４７件）	
被推薦者	作 品 名
岐阜新聞社 豚コレラ取材班 （代表）編集局報道部副部長待遇 宮本 覚	豚コレラの一連の報道
〈作品概要〉昨年秋、岐阜市の養豚場で国内では２６年ぶりに家畜伝染病「豚コレラ」が発生。岐阜県では１８施設に広がり、飼育豚全体の４０％強に当たる約５万２千頭が殺処分された（６月２９日現在）。終息が見えない中、農家、行政を中心に、苦悩が続く現場を追った。	
岐阜新聞社 編集局報道部 大賀 由貴子	連載企画「封印された記憶 岐阜・満州黒川開拓団の悲劇」
〈作品概要〉敗戦後の旧満州で黒川開拓団は未婚の女性たちにソ連軍将校らの性の相手を強要した。「接待」と呼ばれた行為は長い間、元団員の間でタブーとされてきた。かき消されてきた女性たちの声を伝えるとともに、過去に向き合い始めた元団員や遺族の姿を追った。	
新潟日報社 「上を向いて歩こう」取材班 （代表）編集局報道部長代理 野上 丈史	長期企画「上を向いて歩こう 人口減少社会」の連載や関連報道
〈作品概要〉人口減少の最前線とも言える地域が、いかにしてコミュニティーを維持し、将来展望を描こうとしているか、地方紙としての立脚点から見つめ直した。記者が中山間地や離島に住み込むなどし、住民の日常を追った。危機感と同時に「地域の力」が浮かび上がった。	
北日本新聞社 編集局 （代表）編集局社会部部長デスク 勝田 孝成	連載企画「富山進化論—平成のその先へ」
〈作品概要〉平成という時代は、経済の低迷期と重なり、少子高齢化も進んだ。富山県の３０年の歩みを「大合併」「変わる働き方」「ものづくりの力」「くすりの王国」「スポーツ」「教育」「人口減に挑む」の七つのテーマで振り返り、新たな時代を切り開く道筋を探った。	

「企画」部門（４１社４７件）	
被推薦者	作 品 名
京都新聞社 「暮らしと京都観光」取材班 （代表）編集局次長兼報道部長 高田 敏司	キャンペーン報道「暮らしと京都観光」
〈作品概要〉世界的な観光都市・京都。だが、近年の訪日客急増に住民から悲鳴が上がる。交通渋滞や違法民泊の騒音に加え、ホテルの建設ラッシュは地価の高騰を招き、住民が住まいを確保できない事態を招いている。住民目線で観光の陰を見つめ、克服の道を探った。	
神戸新聞社 「新五国風土記」取材班 （代表）編集局報道部長 長沼 隆之	連載「新五国風土記 ～ひょうご彩祭（さいさい）」
〈作品概要〉摂津、播磨、但馬、丹波、淡路。個性際立つ旧五国から成る兵庫県。２０１８年の神戸新聞創刊１２０周年、兵庫県政１５０周年に当たり、多様な歴史と風土が育んだ県土に受け継がれる祭りや風習、四季折々の自然や食に焦点を当て、ふるさとの魅力を再発見する。	
山陽新聞社 西日本豪雨取材班 （代表）編集局報道本部長 桑原 功	西日本豪雨を巡る連載企画「検証・豪雨災害 晴れの国の試練」と一連の報道
〈作品概要〉岡山県を直撃した昨夏の西日本豪雨を巡る一連の報道。大水害の原因と対策を探る長期連載「検証・豪雨災害 晴れの国の試練」をはじめ、連日の災害報道、河川決壊の原因究明や避難所から通学する子どもたちの生活リポートなど随時企画を展開した。	
中国新聞社 災害取材班 （代表）編集局報道部デスク 城戸 収	西日本豪雨の報道と連載「いのちを守る 検証西日本豪雨」を中心とするキャンペーン
〈作品概要〉平成最悪の被害となった西日本豪雨。１３７人の犠牲者を出した広島県を中心に分刻みで当時の状況を再現、全国２万人調査も交え、避難に対する意識を徹底的に検証した。独自のチェックシートや手引書も作成し、命を守るため一刻も早い避難の重要性を訴えた。	

「企画」部門（４１社４７件）	
被推薦者	作 品 名
山陰中央新報社 合区選挙、島根県知事選取材班 （代表）編集局政経部次長 高橋 利明	揺らぐ保守王国～参院合区選挙と島根県知事選～
〈作品概要〉「保守王国」の島根で内部崩壊が起きている。「１票の格差」是正のために導入された参院選の合区は混乱を招き、知事選を契機に保守分裂が生じた。中央集権政治の波にのみ込まれようとしている地方で何が起きているのかを検証し、日本政治が抱える課題を考察した。	
徳島新聞社 「ともに生きる」取材班 （代表）編集局次長兼社会部長兼論説委員 疋田 耕資	連載企画「ともに生きる 認知症７００万人の時代」
〈作品概要〉物忘れや周囲の状況が分からなくなり、日常生活に支障を来す認知症。６年後の２０２５年には７００万人に達するとみられ、高齢者の５人に１人が認知症という未曾有の局面を迎える。対策は急務だ。認知症になっても安心して暮らせる社会の在り方を考える。	
高知新聞社 編集局編集委員室編集委員 天野 弘幹	灰まで焼け——県大３万８０００冊焼却
〈作品概要〉高知県立大学が新しい大学図書館を整備した際、旧館にあった約３万８千冊を焼却するなどしていたことを２０１８年８月にスクープ。連載「灰まで焼け」（１０回）、「続灰まで焼け」（１０回）などで検証報道した。	
西日本新聞社 特命取材班 （代表）編集局社会部長 横尾 誠	超地方紙宣言 連携による調査報道
〈作品概要〉有力地方紙と取材段階から協力し、各地の警察官が昇任試験問題集の出版企業から原稿執筆料を受け取っていた「警察官違法副業疑惑」を一斉に報道。ＳＮＳを活用した「ジャーナリズム・オン・デマンド」連合も拡大し、記事やノウハウを共有、新しい形の地方紙連携に挑んだ。	

「企画」部門（４１社４７件）	
被推薦者	作 品 名
長崎新聞社 「カネミ油症５０年報道」取材チーム （代表）編集局生活文化部長兼論説委員 山田 貴己	カネミ油症５０年報道
〈作品概要〉長崎県など西日本に被害が多いカネミ油症事件は２０１８年１０月で発覚５０年。カネミ倉庫、カネカ、国も関わった事件だが、本格的な被害者救済には至っていない。今も続く健康被害と人権侵害、国や企業の責任、見えにくい次世代被害の解明を目指した。	
熊本日日新聞社 「熊本城のいま」取材班 （代表）編集局文化生活部長兼論説委員 高本 文明	連載「熊本城のいま 震災と復興の足跡」
〈作品概要〉熊本地震で大きな被害を受けた国特別史跡・熊本城（熊本市）について、被害状況と復興過程を検証する連載。熊本城にとって過去最大級の被害といわれており、天守閣や国重要文化財である１３の建造物がかつての姿を取り戻すまでをつぶさに追い続けている。	
大分合同新聞社 「平成と大分」取材班 （代表）編集局主幹編集委員（前編集局統合編集長） 佐々木 稔	年間企画「平成と大分」および「写真で振り返る平成と大分」
〈作品概要〉平成とは大分県にとって何だったのか。街づくり、事件、文化、教育…。各分野を代表する県民２４７人の声を紡ぎながら、３０年の歩みをひもといた。夕刊ではカメラマン・記者が撮った平成時代の写真計１９２枚をほぼ連日掲載し、大分の平成史を可視化した。	
宮崎日日新聞社 「耳をすまして 子どもと障害みやざき」取材班 （代表）編集局報道部次長 小谷 実	耳をすまして 子どもと障害みやざき
〈作品概要〉社会の成熟が進む中、障害者が生きやすい共生社会に近づいているのは確かだが、障害児の日常に目を凝らすと成長段階ごとにあまりにも多くの壁があった。望むように生きられない現実や家族の苦悩を描きながら、多角的に課題を掘り起こし、解決の道を探った。	

「企画」部門（４１社４７件）	
被推薦者	作 品 名
宮崎日日新聞社 編集局報道部 井口 健二	保育園のカンパ金と運営委託費の政治流用を巡る一連のスcoopと関連報道
〈作品概要〉保護者や保育士から保育園が集めたカンパ金や公費である運営委託費が政治資金規正法に違反する形で自民党系の全国組織の政治活動資金や内部留保に流用されていたことを特報した。保育と政治の関係や委託費を巡る問題も調査報道や連載企画で浮き彫りにした。	
南日本新聞社 「維新鳴動」取材班 （代表）編集局文化生活部副部長 桑畑 正樹	連載企画「維新鳴動 かごしま再論」
〈作品概要〉２０１８年は明治維新から１５０年の節目。近代国家として産声をあげ、列強に対抗すべく産業革命や社会改革を進めた歴史の転換点を、維新の原動力となった薩摩から見つめ直す連載。軍事や政治ばかりでなく、経済や教育、外交や文化まで多角的に描いた。	
沖縄タイムス社 「県民投票」取材班 （代表）編集局政経部部長 赤嶺 由紀子	「辺野古」県民投票のキャンペーン報道～沖縄から民主主義を問う
〈作品概要〉名護市辺野古の新基地建設に伴う埋め立ての賛否を問う県民投票では、投票者の７１％超が「反対」の意思を示した。過重な米軍基地負担がある中、暮らしを脅かす基地はこれ以上いらないという民意を示す過程と民主主義とは何かを沖縄から問う。	
琉球新報社 県知事選など一連のファクトチェック取材班 （代表）執行役員編集局長 松元 剛	県知事選などを巡るファクトチェック報道とフェイク発信源を追う一連の報道
〈作品概要〉沖縄県知事選、県民投票など一連の選挙で有権者に正しい情報を伝えるため、初めての試みとして選挙期間中に流される偽情報のファクトチェック報道を行った。また偽情報の発信者を追跡する調査報道を試みた。	

「企画」部門（４１社４７件）	
被推薦者	作 品 名
日本放送協会 ネット広告の闇取材班 （代表）報道局ネットワーク報道部チーフ・プロデューサー 蔵重 龍	ネット広告の闇を追跡したキャンペーン報道
〈作品概要〉１兆８０００億円の巨大なネット広告市場の裏で広がる虚偽や不正の実態を追及。ＳＮＳのフォロワーを購入する「水増しインフルエンサー」芸能人の写真や宣伝コメントをでっち上げた「フェイク広告」広告費をだまし取る「裏広告」の存在を次々に突き止めた。	
日本放送協会 NHKスペシャル「日本人と天皇」取材班 （代表）編成局編成センター専任部長（前報道局社会番組部チーフ・プロデューサー） 山本 大典	NHKスペシャル「日本人と天皇」
〈作品概要〉日本人にとって天皇とは何か、歴史を紐解きながら考える。代替わりにおける重要な儀式「大嘗祭」を再現。天皇と神々との知られざる関係に迫る。さらに皇位継承をめぐるこれまでの議論を検証し、主権者の私たちがこの問題とどう向き合えばよいかを探る。	
日本放送協会 NHKスペシャル「天安門事件 運命を決めた50日」取材班 （代表）報道局政経・国際番組部チーフ・プロデューサー 菅谷 敦 報道局ニュース制作部ニュース7編集責任者 （前報道局国際部副部長） 鴨志田 郷	NHKスペシャル「天安門事件 運命を決めた50日」
〈作品概要〉中国政府が「動乱で319人が死亡した」とする天安門事件。民主化を求めるデモを、なぜ、どのように武力鎮圧したのか、詳細はわからないままだ。今回、中国や世界各地に当事者を訪ね、新史料を発掘。中国の運命を決めた50日を再検証し、事件の謎に迫る。	
日本放送協会 NHKスペシャル「黒い津波」取材班 （代表）仙台放送局放送部専任部長（前同局チーフ・プロデューサー） 山本 雅士	NHKスペシャル「“黒い津波” 知られざる実像」
〈作品概要〉東日本大震災の巨大津波は“黒い津波”だったと多くの証言がある。その黒い水が、被災地の気仙沼市で保管されていた。水の解析、実験、証言、当時の映像などから、町を破壊し命を奪う津波の脅威が、黒くなったことで増していたことを初めて明らかにした。	

「企画」部門（４１社４７件）	
被推薦者	作 品 名
日本テレビ放送網 東海第二原発取材班 （代表）報道局ニュースセンター特別報道班ディレクター 川崎 正明	NNNドキュメント' 18 首都圏の巨大な老朽原発 再稼働させるのか“東海第二”
〈作品概要〉東京から１００キロ先にある茨城・東海第二原発。去年９月新基準に合格した。３０キロ圏の人口は９６万人と国内原発では最多。万が一の時、避難できるのか？風向きによっては、首都圏や福島にも放射性物質が飛んでくる恐れもある。老朽原発の再稼働を問う。	
フジテレビジョン 原発関連疑惑取材班 （代表）報道局取材センター社会部主任 知野 雄介	「除染マネー」と原発関連不正を巡るキャンペーン調査報道
〈作品概要〉原発事故から８年、福島の除染業者が年４３億円もの巨額役員報酬を得ていた「除染マネー」の実態を暴いた。一連の調査報道で大手ゼネコン執行役員が辞職し、環境省・警察・国税当局を動かした上で３兆円に上る除染費を大幅減額できた可能性を社会に提示した。	
読売テレビ放送 報道局報道部 佐藤 篤志	NNNドキュメント' 19 裁判員裁判１０年 ～死刑判決はなぜ覆るのか～
〈作品概要〉裁判員裁判で、市民の出した死刑判決が相次いで覆されている。なぜプロの裁判官は判決を変えるのか。刑罰を決めるのは「国民の良識」なのか「プロの公平性」なのか。当時の裁判員や裁判長ら貴重な証言から裁判員裁判の意義を問い直す。	